

二〇二四年度

札幌大谷大学短期大学部 保育科

一般選抜（Ⅰ期）・特待生試験

国語総合

注意事項

- 1 試験開始の指示があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 問題冊子は八ページあります。
- 3 試験中に印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて試験監督者に知らせてください。

問題一、次の文章を読んで、後の問に答えなさい（文章は設問のために、一部改変している）。

子どもの早期教育やジョウソウ教育に熱心な親たちの間で、「読み聞かせ」が流行^{はや}っているようです。「どんな本を読んであげたら、子どもの脳の発達にいいのでしょうか」

おかあさんたちから、そう質問されることもあります。

みなさん勘違いしているのですが、読み聞かせをするから脳が発達するわけではありません。脳が発達した結果として、読み聞かせた本の内容が理解できる。

じゃあ、どうすれば脳が発達するか。

残念なことに、それは、具体的にはあまりよくわかっていません。人間の成長というのは、非常に長いスパンで観察しなければわからないからです。

(A)、①「識字率」については、わかっていることがあります。

子どもが文字をどれくらい早く覚えるか、ということと一番関係が深い生活習慣は何か。それは外遊び時間です。外で遊んでいる時間が長い子ほど、文字をよく知っている。これは様々な調査があつて、いまはもう常識になっています。

つまり、子どもは、本を読むから、読み聞かせをするから、字を覚えるのではない。活動性の高い子どもが字を早く覚えていく、読んだ本の理解にもすぐれている、ということです。

なぜでしょうか。

昔から言われているように、人は、「知育」「徳育」「体育」という三つで、成長していきます。

「知育」は何かというと、感覚です。五感です。何かを感じる、つまり「i」です。

「徳育」というのは、頭の中で起きることです。五感によって「i」された情報をもとに、行動を決めます。その状況で自分がどういう行動をするか、あるいは行動をどうセーブするか。それを頭の中で決めるわけです。コンピューター用語で言えば「ii」です。

最後の「体育」というのは、この「ii」にもとづく身体の動きです。「iii」と言い換えてもいいでしょう。

この「知育」「徳育」「体育」というのは、脳のはたらかきそのものと言ってもいい。

われわれの脳は、外から「i」を受けて、内部で「ii」をして、それで結果を身体の動きとして外へ出す、つまり「iii」する。

ここで、よく誤解されるのは最後の「体育」です。

身体を動かすというと、何か運動をすることだけのように聞こえますが、そうではありません。

身体の動きは、すべてのコミュニケーションを作っています。言語も表情も。言葉は声帯や舌を動かすことだし、表情は、筋肉の動きです。

②「体育」とはそういうことであつて、さらに言うと、そういう身体の動きというのは、あるプログラムが脳の中にあつて初めてできるのです。

ホンダが開発した二足歩行ロボットがあります。あれは、コンピューターの中に二本足で歩くためのプログラムを入れてある。だから歩くことができる。そのために莫大な費用と大勢の技術者を投入しました。

人間は歩けない状態から始まります。それが、歩けるようになるのは、前述した「入力」「演算」「出力」という脳のぐるぐる回しによって、脳の中にプログラムが自然にできていくからです。

このことを私はこれまで様々な場で繰り返し述べてきました。ここでは、「識字率」と「外遊び」の関係で説明します。

生まれたばかりの赤ちゃんの外遊びの第一歩は、ハイハイです。

ハイハイし始めると、向こうにあるものや景色が一步ごとに違って見えます。

一メートル先にあるリンゴと、五〇センチ先にあるリンゴ、さらにはもっと近づいて目の前にあるリンゴ。これは当然、違って見える。それが、ハイハイという「体育」、つまり運動した結果、脳に入力される。

(B)、「そういう「違って見える状況」をいちいち「違うもの」と認識して覚え込んだら、脳はヨウリヨウをあつという間にオーバーしてパンクしてしまう。

だから、いくら動いても変わらないものは何だということ、脳は自然に学習していく。

つまり、リンゴは大きく見えても、小さく見えても、同じ「リンゴ」だということ、学習するわけです。

これを「文字」で置き換えると、たとえば、同じ「い」という字でも、活字の「い」という字と、手書きで書かれた「い」という字は、厳密に言えば違って見える。それでも、同じ「い」という字と認識する。これを「違う字」だなんて言い出したら大変でしょう。

ちなみに、この③「同じ」であることがわかる、というのは、もつと進んで、たとえば中学生になると、「比例」という概念になります。

三角形は大きさは違ってても、内角の角度が同じなら同じ(相似) なんです。こうしたことは、身体の移動ができるようになってから自然に脳がプログラムを作って覚えていたわけです。

つまり、重要なのは身体を動かすということ。これが運動制御のプログラムになる。それを私たちは様々なことを考えるときに応用するわけです。ちよどコンピュータの中に入ったソフトがいろいろなことに使えるのと同じです。

コンピュータというのは人間の脳をラフにまねした機械です。だとすると、人間の脳でも、どうやって脳の中にプログラムを作っていくかが重要ということになります。

余談ですが、先ほどの「同じである」という認識は、グルーピングといってもいいと思いますが、人間特有の能力の一つで、生物の世界では進化するほど身につけていきます。というか、進化するほど五感が退化していく結果、といってもいいかもしれません。

動物は感覚が人間より(ウエイビ)です。同じ聴覚といっても、様々に聞き分けている。ペットの犬は、人間の側では誰が名前を呼んでも「ポチ」ですが、犬の側からすると、おとうさんが呼ぶ「ポチ」と、おかあさんが呼ぶ「ポチ」と、子どもが呼ぶ「ポチ」とでは、それぞれ違って聞こえているはず。声の高さ一つとってもみんな異なるのですから。

だから④犬の側からすれば、「自分には名前が三つある」と思っているかもしれません。

「識字率」と「外遊び」の関係について、さらに重要なことを説明しましょう。

幼い子どもがはだして「外遊び」をする。

地面の固さは、場所です異なります。同じ地面でも、砂場もあれば、田んぼもある。田んぼでも、あぜ道と水田では地面の固さも(カ)ンシヨクも違う。子どもは、感覚から入って来るそういう「違い」を脳に入力し、それに従って動きを調整していく。

「識字」とは、先ほど説明した通り、一つは「同じ」であることを認識することです。

もう一つは、「違い」を知ることです。「あ」という字と「い」という字は違う。似ているようだけれど、「い」という字と「り」という字は違う。そのためには、「ものに違いがある」ということが認識できないと理解できません。そして、この「ものには違いがある」ということは、外に出て遊ぶ、つまり身体を動かすことで、やはりよくわかるようになるわけです。

その上で、その違いに応じた運動の(ウ)制御、つまり「演算」をし、それに合った身体の動きをする。

固さの違う地面を踏むと、身体の動きをその都度変えなきゃいけない。そうすると頭の中にはある種の運動制御のモデルが自然にできてくる。そう

いう複雑な動きを続けると、(ウ)恒久のものになってくる。それが別なことに使えるということ。地面を識別できるようになるし、識字率もあがる。だから私は、でこぼこ道を歩くと、よく言っています。足の裏から、違う固さの感覚が脳に入力され、その都度転ばない歩き方を脳で演算して、運動つまり出力をする。

知育 (i) — 徳育 (ii) — 体育 (iii) のぐるぐる回しが脳の発達に必要、というのはそういう意味ですが、その中で、^⑤現代社会において一番足りないのは体育です。

わかりやすく外遊びのときのことを例にして言うと、都会で暮らしていたら、アスファルトとかコンクリートという基本的に同じ固さの地面しか踏まない。しかも平坦な地面しか踏まない。

つい何世代か前だったら、山や田んぼのある土地で遊んでいました。一日じゅう違う固さの地面をしょっちゅう踏んでいる。これに比べると、いまの人は入出力関係が単調になっていっているのです。

だから冗談で提案しています。新しい家を建てるときは、階段の幅と高さを一段一段変えましょう。それを「バリアオナーの家」と呼ぶ。いま、冗談と言いましたが、実は半分本気です。なぜなら、そうでもしないと、今後とんでもなく恐ろしい「格差」が起きかねないからです。

自民党が惨敗した参院選 (07年夏) では、都市と地方の「格差」も、争点の一つとなりました。

私は、真の格差は今後、子どもの脳の発達にこそ現れる、と危惧しています。しかも、^⑥東京など都会の子どもの間にです。

繰り返し説明しているように、子どもの発達には、「外遊び」という出力が欠かせません。そして、この外遊びは、コンクリートの地面より、田んぼなど変化に富む地面の方がいい。つまり、自然に近い状態がたくさん残っている、変化に富む場所がたくさんあるところの方がいいわけです。

日本の自然は確かに全体として脆弱になりました。それでも田舎はまだまだ土の地面が残っている。つまり田舎の子どもたちは、親がそれほど意識しなくても、そうした場所である程度は外遊びするわけです。放っておいても遊び回るわけです。

都会ではそうした環境は^(ウ)稀少です。親が「外遊び」というのを相当意識して、そういう場所に連れて行くなどして、かなり意図的にさせないと、自分からはしません。

つまり、親にそういう知識、意識、意欲があるかないかで、子どもの脳の発達に大きな格差が生まれてしまう。最近、都心の公園をたまたま通りがかった友人から聞いた話です。

子どもが木登りをしていました。イチジクの木に登って実を食べていたのです。(C) 相当に高いところまで登っていたのは、なんと女の子でした。

聞くと、名門と呼ばれる私立小学校の子でした。下に数人の子がいて見ていたそうです。私立小へ行くことと頭の善し悪しは直接には関係しませんが、少なくとも彼女の親は教育に熱心だったはず。だとすると、幼いころから、外遊びも十分にさせていた可能性があります。

一方で、そういうことをさせられなかった子どもは、木登りもできなければ、勉強もできない。その子が大人になって、子どもを生んでも、そういう教育をしない。そうすれば、その子どもも同じようになってしまう。

私が危惧しているのは、そういう格差です。小学校の先生からも、こんな話を聞きました。最近の子どもは、かけっこが速い子どもは勉強もできる。身体に特に異状はないのに、かけっこがちゃんとできない子は勉強もできないそうです。

せめて「バリアオンリー」の家を、と言ったのも、こういう事態が進みかねないからです。

(養老孟司・池田清彦・吉岡忍『バカにならない読書術』朝日新書)

問一 傍線(ア)～(キ)について、カタカナは漢字に直し、漢字は読みを答えなさい。

問二 (A)～(C)に入る接続詞を次から選び答えなさい。

・しかも ・そして ・ただし ・ところが ・つまり

問三 傍線①「識字率については、わかっていることがあります」とあるが、既にどのようなことがわかっているのか。その箇所を本文から探し、七文字で書き抜きなさい(句読点も含む)。

問四 【i】【ii】【iii】に入る言葉をそれぞれ本文から探し漢字二字で答えなさい。

問五 筆者の述べている傍線②「体育」の意味を本文の言葉を使って四〇字以内で説明しなさい。

問六 外遊びをすることにより、傍線③『同じ』であることがわかる。よくなるのはなぜか。その理由を本文の言葉を使って四〇字以内で説明しなさい。

問七 傍線④「犬の側からすれば、『自分には名前が三つある』」と思ってしまうのはなぜか。「進化」「同じである」という言葉を使って六〇字以内で説明しなさい。

問八 傍線⑤「現代社会において一番足りないのは体育です」とあるが、これを言い換えている箇所を本文より探し一九字で書き抜きなさい。

問九 子どもの脳の発達における格差が傍線⑥「東京など都会の子どもの間」に起きてしまうのはなぜか。本文の言葉を使って八〇字以内で説明しなさい。

問十 筆者は「バリアオンリー」の家を建てることによって何を期待したのか。本文の内容を踏まえて五〇字以内で説明しなさい。

問十一 次の各文を読んで、本文の内容と一致しているものは○、異なるものは×と解答しなさい。

ア どうすれば脳が発達するかについて、具体的なことは明らかになっていない。

イ 都会では経済的な格差も著しいので、子どもの脳の発達にも格差が生じやすい。

ウ 子どもの脳の発達のことを考えて、比較的自然が残る田舎に住むべきである。

エ 「識字」とは、「同じ」であることを認識することと「違い」を知ることである。

オ 名門の私立小学校の生徒は、一般的に運動も勉強もできる傾向にある。

問題二、次の文章を読んで、後の問に答えなさい（文章は設問のために、一部改変している）。

集団生活は息苦しくて、なんだか苦手。こんなことを思ったことはありませんか。閉鎖的で拘束力の強い集団は、①「ムラ社会」などと呼ばれ、第二次世界大戦後、知識人から批判の対象となってきました。その背景には、集団的な社会が個々人の自由を損なってきたという考えがあります。「日本社会の集団的体質」と聞いて、良い印象を抱く人は、あまりいないでしょう。

ひるがえって、②「いまの社会を見ると、人びとは自由に、いろいろなことをできるようになりました。お金というのセイヤクがなければ、お休みの日に何を着て、何を食べるか、どこに行くかは自由です。進路や家族のあり方についても、自由に決められるようになりました。まさに、「人それぞれ」の時代と言えます。

しかし、「人それぞれ」の社会は、そう簡単には実現できません。「人それぞれ」にいろいろなことができるようになるためには、集団的体質から脱する必要がありそうです。というのも、集団のなかに埋没した生活では、どうしても集団のルールに合わせて生活せざるを得ないからです。

社会のさまざまな単位が、集団から個人中心になることを、③社会学では「個人化」と言います。ウルリッヒ・ベックという社会学者が一九八〇年代に提唱しました。個人化には、共有から私有へといった物的側面の個人化と、個々人の意見の尊重などに代表される思想的側面の個人化があります。日本では、一九九〇年代後半から個人化が進んできたと言われていました。

「人それぞれ」が浸透した社会は、個人化が進んだ社会と言い換えることもできます。そこで本書では、議論の手始めとして、「人それぞれの社会」が成立した条件から見えていきましょう。

集団的な体質から抜けだし、「二人」になるためには、物的あるいは思想的条件を整えなければなりません。まず、それぞれについて見ていきます。

物的条件は、物質的に豊かになることで達成されます。ものの不足を共有によりまかなってきた時代、集団から抜け出し一人になることは、容易ではありませんでした。たとえば、農村では、道、河川、林など、あらゆるものを共同で管理し、共同で使ってきました。人びとは互いに協力することで、それぞれの生命を維持してきたのです。

④このような社会では、集団のルールを守ることが何より重要です。というのも、ルールを破る行為は、他者の生命を危険にさらすからです。ゆえに、集団から抜け出し、一人の生活を楽しむには、あるていどの物の豊かさが必要だったのです。

とはいえ、「二人」になれるほどの豊かさは、そう簡単には得られません。日本人の多くが一人の生活を楽しめるようになったのは、第二次世界大戦後の高度経済成長あたりからです。それまでの日本は、農業人口が大多数を占める農村社会でした。七〇年くらい前まで、日本は、集団的特質がかなり強い社会だったのです。

一九六〇～七〇年代に入ると、経済成長とともに、家族団らんの場合としてのお茶の間が家庭から消えていきます。それと引き換えに、それぞれの家には個室が配置されるようになりました。日本社会が「消費社会」と言われるようになるのも一九七〇年代あたりからです。

一九七〇年代の後半には、それぞれの部屋にテレビが設置されるようになり、一九八〇年代後半から九〇年代に入ると、各部屋にはルームエアコンまでもがハイビされるようになりました。一九九〇年代後半には、パソコン、携帯電話といった情報通信機器が爆発的にフキウしていきます。

総務省の『通信利用動向調査』によると、二〇一八年には、七九・二%の人がスマートフォンを持ち、四六・一%の人が携帯電話をもっています。さまざまな進歩の結果として、私たちは、快適な個室で情報機器を駆使しつつ、身体的に接していない「ソト」の人や場とつながる自由を手にしまし

た。

物の豊かさは、私たちから、物品の貸し借りの手続き、管理方法の決定といった調整コストの多くを(三)ハブいてくれます。テレビが複数台あれば、チャンネル争いをする必要はありません。「人それぞれ」に好きなものを見ることができます。

同時に、機械技術が進歩することで、これまで共同でやらなければできなかったことも、一人でできるようになりました。さらに、生活サービスが充実することで、機械にゆだねることのできない行為も、お金で購入できるようになっていきます。今や、一定の資産をもち、通信環境を整えれば、人と会わない生活も可能です。

一定の資産がない人を救う社会保障制度も、ほころびの多さは指摘されるものの、着実に整えられてはきました。私たちの生きる時代は、閉鎖的な集団に同化・埋没することで生活を維持していたムラ社会の時代とは違うのです。私たちの生活は、身近な人間関係のなかにではなく、お金を使うことで得られる商品・サービスと、行政の社会保障にゆだねられているのです。

もう一方の思想的条件とは、⑤「一人」あるいは「個人」の生活を後押しする考え方の(四)拡がりです。代表として、人権思想や自由主義思想があげられます。

もともと、身分制度との戦いを目的とした人権運動は、ヨーロッパ、アメリカを中心に広まっていきました。この人権の思想も、第二次世界大戦後の一九四八年に「世界人権宣言」という形で、世界に拡散していきます。「はじめに」で紹介した多様性の話も、その延長線上にあります。

もう一方の自由主義思想は、「他者への危害」を加えないかぎり、個人々の自由をかぎりなく尊重することを提唱しています。そのため、人権思想と密接な関わりがあります。この思想もヨーロッパに(五)キケンをもち、ジョン・スチュアート・ミルが一八五九年に出版した『自由論』が有名です。私たちの憲法が保障するさまざまな「自由」も、こういった思想を背景としています。

人びとの主義・信条・行為を尊重する考え方は、学校の現場では個性の尊重という形で表れてきました。物的な豊かさを獲得した一九八五年には、臨時教育審議会の第一次答申で「個性重視の原則」が訴えられるようになります。

この頃は、国際競争が激しくなり、いじめも(六)ピンパツし、画一的な日本の教育に厳しい視線が注がれていました。だからこそ、「自他の個性を尊重し、自他の個性を生かすこと」に注目が集まったのです。

個性の尊重は、その後も、私たちの社会に共通の価値観として重んじられていきます。進路指導は、教員側からの一方的な指導ではなく、児童・生徒個人々の「やりたいこと」に注目するようになりました。「やりたいこと」への注目は、教育の場にかぎったことではありません。一九八〇年代には「自分探し」がひとつのブームとなります。

人びとが「やりたいこと」を重視するようになれば、集団の拘束力は必然的に弱まります。というのも、人びとは、集団の意向を重視せずに、個人々の「やりたいこと」を優先するようになるからです。こうして、物的にも思想的にも「一人」になりやすくなる条件が整いました。

二〇〇〇年代に入ると、個性の尊重の流れに多様性尊重の流れも加わります。この流れとともに、今までマイノリティとみられてきた人びとの権利を見直す機運が高まりました。同時に、さまざまな志向も「多様な志向のなかのひとつ」として受け入れられるようになっていきます。多様性尊重の流れは、二〇〇〇年以前からあったのですが、日本社会で明確に意識され出したのは、二〇〇〇年代以降といつてよいでしょう。

〔石田光規『人それぞれ』がさみしい 「やさしく・冷たい」人間関係を考える』ちくまプリマー新書〕

問一 傍線(ア)(カ)のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 傍線①「ムラ社会」と②「いまの社会」とはそれぞれどういう社会か。文中の語句を使ってそれぞれ三〇字以内で説明しなさい。

問三 傍線③社会学でいう「個人化」とはどういうものか。文中の語句を使って五五字以内で説明しなさい。

問四 「人それぞれの社会」が成立した条件を、それぞれ五字以内で二点答えなさい。

問五 傍線④「このような社会」とはどういう社会か。文中の語句を使って五〇字以内で説明しなさい。

問六 傍線⑤「一人」あるいは「個人」の生活を後押しする考え方の拡がり」は、学校現場ではどのような形で表れたのか。文中の内容を一〇〇字以内でまとめなさい。